

宮沢賢治『歌稿B』「大正十年四月」の短歌に関する考察（上）

濱 田 有 紀 子

賢治の短歌は、大別すると『歌稿A』と『歌稿B』とがある。『歌稿A』とは、明治四四年より大正九年春までの賢治の短歌を、妹トシとシゲ、そして賢治が編集した一行書き短歌である。成立は、大正九年夏頃と考えられている。ついで『歌稿B』とは、『歌稿A』に賢治が推敲加除して新作（「大正十年四月」）を加え、一冊にまとめたもので、成立は大正十年秋頃から十一年前半ではないかと推定されている。

『歌稿A』は一行書き短歌であるが、『歌稿B』はそのほとんどが二行から五行の行かえがなされている。しかし今回、本稿で取り上げる『歌稿B』における「大正十年四月」の短歌群は、一行書きに復帰しているのである。また、この短歌群は『歌稿B』にのみ収められたもので、『歌稿A』にはない。そうしたことから、この「大正十年四月」の短歌群は特殊であり、賢治がこの短歌に込めた意図は重大であったように思われる。

さらに、大正十年という年は、賢治の伝記的事実と重ね合わせてみても重要な時期であることが分かる。父政次郎に一家の日蓮宗へ

宮沢賢治『歌稿B』「大正十年四月」の短歌に関する考察（上）

の改宗をせまったが受け入れられず、布教活動に従事するため、賢治は突然無断で上京する。それが大正十年一月（賢治二十五歳）のときのことである。同年四月、父は賢治の生活の様子をみるため、また意思疎通を図るために賢治を伊勢参宮旅行へとさそう。この短歌群には、その時の父との旅行について、歌ったものが収められているのである。

本稿では、「大正十年四月」の短歌群の中でも、とりわけ賢治の青春後期における宗教観が最もよく反映された、父との関西旅行を中心に、短歌の作品内容について詳細に分析する。さらに、後年の《心象スケッチ》への展開、また余白がないという一行書き短歌の意味についても考察をすすめてゆきたい。

*

まず大正十年四月、賢治が父との伊勢参宮旅行に出かけるまでの経緯をたどってゆくことで、青春後期における賢治の宗教観を確認しておきたい。三浦正雄氏は、『宮沢賢治の宗教的短歌』¹⁾という論の中で、青年前期の賢治の求道について次のように述べる。

賢治の父が熱烈に信仰し、島地大等との出会いを生んだ浄土真宗・「尾崎文英について参禅し、青々と剃つて丸坊主にな」ったことともある曹洞宗、そして「島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』(明治書院 大3・8)を読んで異常な感動を受けたことに始まり、一時は国柱会の熱烈な信者とまでなり、生涯にわたる日蓮宗—これらが、賢治が特に深く関わった仏教の宗派である。さらにタツピングやブジェとの接触による、キリスト教への関心も見出せる。

あらゆる宗教・宗派に距離を感じ、精神的支柱を切望する賢治の救済への祈りが、これらの短歌(＊明治四十四年—大正五年の短歌)を生んだのであろう。(＊)—濱田

賢治は大正五年までに、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗、キリスト教への関心を示していた。三浦氏の指摘によれば賢治は「あらゆる宗教・宗派に距離を感じ」ていたとある。それら宗教の中で特に、法華経の教えだけは賢治の心をとらえて離さなかったであろう。そのことを示す賢治の有名なエピソードがある。大正九年十二月のこと、雪の降る花巻の町を、賢治は声高々とお題目を唱えながら歩いたのである。これは、一家の改宗に乗らない父への反抗であった。賢治のこの奇怪な行動に対し、父は次のように言つたという。

父親が賢治さんのひたむきな、あるいはむしろ狂信的な日蓮宗唯信に反対し「聖徳太子は日本で仏教をおひろめになつた最初の方とも申すべき偉いお方である。仏教全般にわたつて御理解があつ

たのであるが、法華経ばかり読め、他のお経なんかどうでもいとおつしやりはしないであらう。どれも同じお釈迦様の説かれたお経ではないか。法華経にばかり気張つていないでそんな所も調べて見たらどうだ」と言われた。

しかし大正十年一月、賢治の法華経への信仰の念、いよいよ強くなる一方であり、浄土真宗を固持する父と激しい法論を行つた末、賢治は突然家出を決行、上京する。家の質屋という家業に不満もあり、また不向きでもあつたのだが、それ以上に父との宗教上の争いが、賢治の家出を決心させたのだ。父は、賢治の身の上を案じて上京し、二人の關係改善のためにと関西旅行を提案した。その時のいきさつと、父の心情を堀尾青史氏は、次のように述べる。

父は信仰上の対立が生じたとき、古聖の法論を探り、諸派派生の由来を知り、冷静に研究を怠らぬよういましました。今回は伊勢まいりの上、日本仏教の始祖ともいふべき聖徳太子、伝教大師の遠忌を幸い、実際に法灯の伝統に触れ、法華経と国柱会にとらわれすぎる点を反省させ、併せて感情の融和をはかうとしたようである。従つてふたりとも帰正問題は全く口にせず、父としては自然な解決—賢治の帰国—を半ば期待したようであつたが、その点では初志をまげず、父を上野駅に送り、丁寧に頭を下げた。「あんなことには並はずれて丁寧な男でございました」とは、後年の父のことばである。

旅行中、二人は互いの宗教について、口にするのではなく沈黙していた。その緊張状態にある沈黙が、「大正十年四月」の短歌群の中では、どのように表現されているのか。

父との関西旅行にいたるまでの賢治の宗教的遍歴、伝記的事実をふまえた上での、短歌の考察をする。

*

賢治の弟清六は、この頃の父と賢治とを回想して、次のように言う。四月に父が上京して「あまり堅いことばかり言わないで、一しょに旅行でもしよう。比叡山はお前の好きな伝教大師も日蓮上人も、各宗の祖師たちも修行された霊場だから。」と云って、比叡山や伊勢や奈良を旅行した」とある。

旅中草稿

801 父とふたりいそぎて伊勢に詣るなり、雨と呼ばれしその前のよる。

伊勢。

※

765 降りしきる雨のしぶきのなかに立ちて、門のみ名など衛士は教へし

降りしきる雨の中、父と賢治以外、この日伊勢参りに来る人はいないかのようである。そうした荘厳な中、肅々として二人は、門の前に立っている。

763 杉さかき 宝樹にそぐ 清とうの 雨をみ神に謝しまつり
つ、

※

764 かゞやきの雨をいたゞき大神のみ前に父とふたりぬかづかん

父は浄土真宗、賢治は法華経とそれぞれ信仰の違う二人が、日本古来の神道である神に対し、額を地につけんばかりに雨の中を礼拝するのである。父には父の宗教に対する思惑があり、その思いを無言で伝えようとして、この旅行に賢治をさそっている。賢治もそんな父の思惑を読みとっている。互いに宗教について口にするのではなく、二人とも歩み寄りを示そうとしているのである。〈大神のみ前に父とふたりぬかづかん〉というのは、そんな父と子の、関係回復を態度として表現したものであつたろう。浄土真宗、法華経信仰という対立的な関係の中に、日本固有の民族信仰である神道を媒介にして、二人の關係に繋がりをつけたのではないかと考えられる。法華経信仰と神道では、賢治の信仰に矛盾があるのではないかと、との疑問も自ずと浮上するが、しかし今の賢治にとって、この旅行の目的は、信仰の矛盾よりも父との関係回復の方が第一なのである。そしてまた、父はこの旅行の目的を、賢治が宗教に対する幅広い目をもつことを望んでいたのである。

旅行中の賢治が、最も自分の言いたいことである法華経信仰への思いを、この短歌群では書いていないのである。その黙して語らざうという態度の中に、賢治の精神の自己抑圧があるのだと思われる。

766 透明のいみじきたまを身に充て、五十鈴の川をわたりまつりぬ。

前の短歌四首とこの一首に見られるように、雨の清らかさが、何度も強調されている。雨のもつ、この清らかさを、自分の身にあってということとは、雨による自己浄化を意味するのではないか。またその雨にうたれながら、五十鈴川を渡るという。それは賢治が、ここから新たに踏み出そうとして、浄化されることを願う思いが、何度も繰り返して表現される雨の清らかさの中に、込められているのではないか。

767 五十鈴川 水かさ増してあらぶれの人のころもきよめたまはん

768 みたらしの水かさまして埴土をながしいよきよきとみそぎまつりぬ。

質屋という家業は、貧しい農民から搾取することで成り立っているものであり、また賢治はそれで生計をたてている父の庇護を受け生活している。その背後に、大正デモクラシーという時代の気運があることを考えれば、賢治の心情はおだやかではないだろう。友人の保阪嘉内も、〈諸君人民にゆけ、百姓をせよ、そしてわれわれのハッピー、キングダムを作れ パラダイスを作れ[＊]〉と日記に挿入された、ノートの破片にて書いている。しかし賢治は、明治という父、家業

という呪縛から逃れられないのだ。その必死で、もがきあがいていく様子が、神に対する七番の〈あらぶれの人のころもきよめたまはん〉という自己の認識だったのではないかと思われる。

771 大前のましろきざりにぬかづきて、たまのしぶきを身にあげしかな。

神の御前にある真白な砂岩の砂利にぬかずに、雨のしぶきを身にあげる賢治。雨という浄化作用を促す、しぶきを身にあげることで、神道への敬いの念が一層強くなっているように見える。法華経信仰のはずの賢治が神道への傾きを示している、この短歌の内容とは、明らかに彼の信仰の矛盾なのではないか、裏切りではないかとの批判もある。宮沢賢治生誕百年記念として刊行された雑誌『短歌』において、岡井隆／佐藤通雅／小池光／今野寿美ら四氏による座談会が催され、その中でこの問題は次のように話し合われている[＊]。

伊勢神宮の歌の不可解さ

小池光・宮沢賢治をもつてしても、伊勢神宮へ行くと、無条件に「謝しまつりつ、」「ぬかづかん」「きよめたまはん」というレベルで、短歌表現がそこへ走っていつてしまふ。これはどこかで見た光景だと思つたら、戦争短歌は全部、同じ構造なんですよ。(略) こういう伊勢神宮の一連をどう考えるのか。(略) 法華宗の信者と伊勢神宮はそもそも矛盾しないのかどうかもわからないしね。

岡井隆・それは矛盾しないんだなあ。こつちのほうは要するにア
ニズムでしょう。神道というのが宗教という段階でとらえ
られないかたちになっている。

信仰上の矛盾ではないのかと問う小池氏に対し、岡井氏は、
「神道というのが宗教という段階でとらえられないかたちになっ
てい
る」のだと応じている。これを信仰上の矛盾と考えるか、自然への
敬いと見るのかという事もそうなのだが、さらにこの短歌を不可解
なものにしている点について、この座談会の中では次のような指摘
がある。

大正十年というと、賢治の短歌への熱気は、そろそろ冷めている
頃のはず。この短歌群は『歌稿B』にだけ、入っているということ
から考えると、もしかすると、文語詩を想定した段階で作ったもの
とも考えられる。つまり、昭和七、八年というレベルの社会を背景
にした作品として、とらえる方がいいかもしれない。しかし、証拠
がないのだと、先の対談の中で佐藤通雅氏は述べる。

もし、佐藤通雅氏のいうように、昭和七、八年という日本が軍国
主義に向かっている時に、この作品が書かれたものなら、この短歌
はもつと複雑な様相をおびてくるだろう。大正十年時の体験を、昭
和七、八年の時に『歌稿B』へ書き加えたという指摘。時間差があ
るといふような現象は、賢治作品にはめずらしいことではない。例
えば、初期短編綴の「秋田街道」の場合、大正六年にあつた出来事
をまず短歌として書き、それから大正九年にその体験を散文詩風作
品へと書きかえたという例もある。しかしこの短歌群を、先の例の

ように時間差があるとみてよいのかどうか。昭和六、七年という社
会を背景にした作品としてとらえるべきか。

昭和六年、満州事変をきっかけとするナショナリズムの高揚で、
思想・言論に対する取り締まりが強化され、治安維持法による多数
の検挙者があり、彼らの多くが国家主義へと転向した。このような
軍部の台頭する時代背景の下に、賢治はこれら日本回帰の短歌を書
いたのだとすれば、現代の我々の目から見ても、大いに問題があるよ
うに思われる。しかしたとえ、これが大正十年に書かれたものであつ
ても、昭和七、八年に書かれたものであつても、賢治がこの短歌で
表現したかったことは、神道への信仰上の転向を意味するものでは
ない。大正十年当時の、父との宗教上の争い、その関係回復をは
かるためのものであり、外に向かつて開かれた宗教を見つめ考え直
すことが、この短歌において表現されていることなのだ、本論で
はこの後、論拠を挙げながら主張してゆく。また、岡井氏のいうよ
うに「神道というのが宗教という段階でとらえられないかたちにな
っている」というのは、次の短歌二首をみても理解できるだろう。
賢治は、神道への信仰上の転向などはしてはいないのである。

772 五十鈴川 水かさ増してはにをながし天雲ひくく杉むらを翔
く。

※

773 雲翔くるみ杉のむらをうちめぐり 五十鈴川かもはにをなが
しぬ。

降りしきる雨によつて、五十鈴川の水かさは増して泥を流し、雲は低く垂れ込めて、杉の群立ちの中を翔けめぐる。天雲がひくく杉の群立ちを翔けるとは、自然の荒々しさを表現しており、自然はいつも恵みのものとは限らないという、自然のもう一つの側面を描いているのではないだろうか。また三番の、雲は翔けるように、杉の群立ちをめぐつて、五十鈴川もまた、泥を洗い流している。ここにも自然の威力が表現されており、またそれと同時に、天雲は雨をもたらし杉や川にふりそそぐというところに、自然の営み・循環（サイクル）が示されている。つまり、自然への敬いの念があるように思われるのである。

賢治はこの短歌で、神道への傾斜を示しているのではない。そして、昭和七、八年に書かれたものであるという説にも従えない。本論では、大正十年説、そして自然への敬意を示すものとして、この短歌をとらえ分析する。

774 ありあけの「月はのこれど」松むらのそよぎ爽かに日は出でて
んとす。

夜明け方、月はのこっているけれど、松の群立ちの中から、風はそよぎ、また爽やかに日がまさに出ようとしている。今まさに、日の出（＝太陽）をむかえようとしている。新たに賢治の目が開かれてゆくことを、夜明け方の風景に寄せて、歌っているのではないだろうか。開眼の夜明け、仏教に対する思いはのこれど、今爽やかに自然への敬虔な思いが賢治の中に湧き出ようとしている。内田朝雄

氏は『続・私の宮沢賢治』^{〔*〕}の中で、大正十年は特に重要な年であるとして、付属資料として年譜を作成している。その中で内田氏は、父とふたりいそぎて伊勢に詣るなり（大神のみに父とふたりぬかづかん）（あらぶれし人のころもきよめたまわん）（埴土をながしいよよきよきとみそぎまつりぬ）（たまのしぶきを身にあびしかな）という五首を引いて、このような語句のうちに、賢治のころの変貌の過程を見ようとするのは行き過ぎであろうか、と言われる。しかしここには確かに、賢治の新たな世界観の広がりと、（ころの変貌の過程）を読みとることができるように思われる。

比較 根本中堂

775 ねがはくは 妙法如来正徧知 大師のみ旨成らしめたまへ。

六世紀、中国天台山の智顛が大成した天台宗は、法華経を根本經典とし、最澄が八〇五年に唐から伝え、禪・密教を総合した日本天台宗学を確立し、比叡山に延暦寺を創立した。その頃の大師の正しい意向を今ここに顕現してほしいという賢治の祈り、像法へ寄せる夢が語られているのである。どうか、妙法蓮華経の如来様、正しい悟りを開いた伝教大師のご意向を成就させて下さい、と。

大講堂

776 いくしき五色の幡はかけたれどみころいかにとざしたまはん。

※

777 いくつしき五色の幡につ、まれて大講堂ぞことにわびしき。

大正十年は、伝教大師の一千一百年忌ということもあり、記念法要が行われていたのである。おごそかで立派な五色の幡（旗）はかけてあるけれども、その派手さ加減が、大講堂をことにわびしいものになっている。それは大師のみ心が、閉ざされているからではないかと賢治は感じているのである。

778 うち寂む大講堂の薄明にさらぬ方してわれないのなり。

779 あらたなるみ像かしこくか、れども、その慕はしきみ像はあれど。

780 お、大師たがひまつらじ、たゞ知らせきみがみ前のいのりをしらせ。

782 われもまた大講堂に鐘つくなりその像法の日は去りしぞと。

七七八番の歌に見られるように、大講堂の薄明かりの中で、賢治は「さらぬ方してわれないのなり」という。その祈りの内容が七八〇番に浮き出ている。すなわち、伝教大師よ、あなたが仏の前で誓ったみ旨を、ただわたしに知らせて下さい、というのである。

そうして賢治もまた皆と同じように、大講堂に向かって、鐘をついた。釈迦の教えを忠実に守り、修行していた頃の、大師ご存命中

のあの日は終わったのだと、かみしめながら鐘をつく賢治。梵鐘の音には、煩惱のけがれがない清らかなこと、無我や空の意味が込められており、それは神聖さの象徴であろう。しかし賢治にとって、この梵鐘の音はどこかそらざらしいものとして、響いたのではないだろうか。

琵琶湖

781 みづうみのひかりはるかにすなつちを掻きたまひけんその日遠しも。

783 みづうみは夢の中なる碧孔雀まひるながらに寂しかりけり。

中村稔氏は、七八三番の歌について「青孔雀のようにひろがる琵琶湖のすがたに宮沢賢治は異様な戦慄を感じたのであり、「寂しかりけり」と結ばれてはならないものであった。この句の抽象的で空虚なひびきがこの歌を短歌的抒情に収斂させていないのだが、この句の空しさを賢治は自覚していたろう」という。

この二首の歌は、山頂から臨む湖面の輝く光に、如来の智慧を感じているのである。大師ご存命中の頃の日は、遠い昔のことだという。琵琶湖は、賢治の像法という夢の中では「碧孔雀」でも、現実には「まひるながらに寂しかりけり」となるのである。夢と現実との二重の風景が、この短歌の中で表わされているのである。

内田朝雄氏は、これら一連の短歌を次のように指摘する。「大講堂」には、宗祖最澄をはじめ「鎌倉仏教」の各派の宗祖の像が三方

宮沢賢治『歌稿B』〔大正十年四月〕の短歌に関する考察(上)

の壁にずらりと掲げられており、「その慕しきみ像」賢治の慕わしき「日蓮」の像もある。その「宗教的歴史」のなかで揺れる賢治の「認識」から、「法」(＝像法・濱田)への「祈り」のはげしさが生れる。「その時」と「その場所」が「人間の心」に与える「機」というものは、私共の誰にもある^{(*)11}のだという。大師ご存命中の頃の日の、像法への賢治の思いのはげしさが、夢と現実の二重の風景をうみだしているのだといえる。

賢治は、伊勢神宮では神道に心を動かされ、また比叡山では天台宗、仏教へと、この旅行の経緯に従って、短歌で読まれている対象はどんどん移り変わってゆく。しかしそういう日本の宗教の歴史的要遷を、この旅行において順に辿ってゆくことで、それが機縁となり、賢治の心には確かな宗教的広がりができつつあると見てよいのではないだろうか。

- (*)1 三浦正雄「宮沢賢治の宗教的短歌―青年前期の求道とその帰結―」(『賢治研究』宮沢賢治研究会 昭和六十三年十月)
- (*)2 森莊巳池「賢治の短歌」『校註・宮沢賢治歌集』(日本書院版 昭和二十七年五月) ↓ 『宮沢賢治の肖像』
- (*)3 佐藤隆房『宮沢賢治』(富山房 一九四二年九月) ↓ 『新版宮沢賢治―素顔のわが友―』
- (*)4 (※2)に同じであるが要約し、かつ文章の補強を行った。
- (*)5 堀尾青史『宮澤賢治年譜』(筑摩書房 一九九一年一月)
- (*)6 宮沢清六「兄賢治の生涯」『新文芸読本 宮沢賢治』(河出書房新社 一九九〇年九月)

(*)7 保阪庸夫／小沢俊郎『宮澤賢治友への手紙』(筑摩書房 昭和五十四年十一月)

(*)8 岡井隆・佐藤通雅・小池光・今野寿美「特別座談会」

〔短歌大特集生誕一〇〇年記念歌人・宮沢賢治〕角川書店 平成八年十月号

(*)9 内田朝雄「付」年譜・宮沢賢治における「大正十年」〔続・私の宮沢賢治〕(農村漁村文化協会 昭和六三年九月)

(*)10 中村稔「短歌・冬のスケッチ」『宮沢賢治ふたび』(思潮社 一九九四年四月)

(*)11 (※8)に同じ。

付記・この後に続く(下)の部分は、「梅光学院大学・女子短期大学部論集」第三五号に掲載されています。